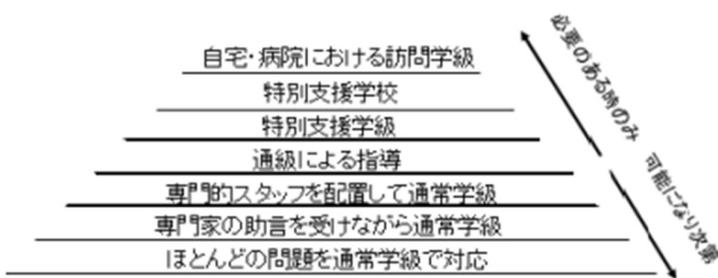


通級指導教室における指導について（講師：増本 利信）

○義務教育段階の多様な学びの場の連続性



個々の教育的ニーズのある児童生徒に対して、**多様で柔軟な仕組み**を整理する事が重要である。小中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった**連続性のある「多様な学びの場」**を用意しておく事が大切。

○通級による指導を受けている児童生徒数

平成18年頃から生徒数の増加が大きくなってきている。（平成18年～『特殊教育』という考え方から『特別支援教育』へと大きくシフトした年である）

○通級指導教室の関わり方

評価的な関わり…困難さを理解するためにどう理解するか??どんな事をどのくらい、なぜ困っているのかを視覚的にアセスメントする。→担任や保護者、本人と共有する→指導目標を定期的に点検
<通級教室で活用していた評価 例>



治療的な関わり…子ども自身の困難さを改善したり、克服したりする関わり。個別指導において、視知覚認知、音韻認知、書字スキル、数概念、不器用さの軽減、社会スキルなど
●本人に合った覚え方、学び方、方法を取り入れていく事で、本人がその活かし方を理解することが大切。

楽屋的な関わり…在籍教室で生活が安定するような関わり
(例:緊張の強い子や教室への行き渋りなどある子にどんなステップを踏むといいのか?子どもと一緒に考える・不適切な行動の軽減の為にトークンを取り入れる・服薬の管理が難しい子へ目的や効果などを伝える事や、飲んでいるかの確認、飲めた事を褒める等)

○通級指導の難しさ

- ・何を、どこから、どのように指導すべきか判断が難しい
- ・次から次に課題が見え、通級指導をやめる事ができない
- ・在籍教室との関係の持ち方が難しい
- ・自校通級の保護者との意思の疎通が難しい



☆明確な目標設定やアセスメントと適した支援の検討が大切→評価面談を定期的実施し（通常学級の先生や保護者）目標や手立ての点検と確認をしていく

○通級指導教室では…

ニーズのある児童や保護者をできるだけ多く支援したい→入るのも簡単で出るのも簡単となるのが理想→その為に、明確な指導目標と定期的に行う面談でこまめに総括していく

『自立すべきは 子どもではなく 担任と保護者』である